かつて子どもたちが遊び、うさぎ一家がくつろいだ幼稚園の庭は、都会の一隅の小さな空間に過ぎなかったが、私たちに四季折々の自然と安らぎを感じさせてくれた。庭の隅に植えられた桜は年毎に成長し、入園式には満開だった。垣根のバラが花を咲かせるように咲く頃には、花びらを採ったり遊んだ、小さな芝生でもあったりしていた。

松井とし

ジャブ池で水浴びをしたり、園庭中をどろんこにして遊ぶ子どもたちの歓声がこだました。大騒ぎのシャワー着替えを終え、ほっとして外の緑に目をやると、テラスの花壇に風船が吹き揺れていた。

二学期は生い茂った雑草の中の虫とりと、おしい花とあさがおの色づくりで始まった。ジャングルジムの上に、大規模な枝を張った大きい木からは、帽子をかぶったままのつややしたちどんぐりが落ちた。木枯らしが吹く頃になると、少ない落葉をみんなで一生懸命集めて焚き、やきいもを作ってふわふわ言いかえながら食べ

時標

（19）
園をとり囲む植え込みに、真白い水仙が香り良く咲き始めると、よい冬の日陰になって冷たい風が吹き抜けても子どもたちは元気いっぱい。毎日サッカーに興じていた。
ささやかながら自然ともに子どもたちが暮らす平和な園は、生きるもののたつてオアシスだったのだろうか。迷子の犬やリス、カメ等の突然の来訪者が驚かされたこともしばしばで、あっ、最後の頃には、野鳥も訪れてくれるようになった。本を片手にバードウォッキングを楽しになり、テラスの雨とりの中では、年齢を超えてもなお、しばらくはカーテンを引いたままで、まるで夏休み中のようになる。幼稚歴史を閉じてもなお、しばしばはカーテンを

（元・幼稚園教諭）